



サウザンプトン大学人間動物関係学研究所の研究室内にて飼育されていた猫と

という言葉は「発展途上国では」という言葉とはほぼ同義であり、私は唾然とした。ヨーロッパ人にとっては彼らが世界の中心であり、米国は動物の福祉よりも利益や合理性を重視し、アジアは野良犬や野良猫が多く、犬や猫を食べたりする野蛮な地域、アフリカは人間の飢餓問題があるため動物福祉に取り組みづらい地域、といった画一的な見方が存在していた。これに気づいたとき、私自身も日本にいたときは、日本が世界の中心にあるかのような感覚を抱いていたことを痛感した。また、長い植民地支配の歴史を持つヨーロッパ人にとっては、アフリカやアジアの動物たちに関しても自分たちが何とかしなければならぬという使

命感が強いようだった。私は幾度となくアジアも全て同じではないと主張したが、英語の文献には日本に関する記述がほとんどなく、この体験は私にとって、動物福祉問題に限らず、情報発信の重要性や文化的背景が思想へ及ぼす多大な影響を認識するきっかけとなった。

修士論文の作成にあたり、日本ではあまり研究する機会のない伴侶動物の行動に関する研究を行うこととしたため、九九年の夏はサウザンプトン大学人間動物関係学研究所で過ごし、猫のストレスの評価に関する実験を行った。九月にエジンバラ大学のコースが終了した後は、サウザンプトン大学に研究生としてさらに半年間滞在し、犬や猫などの行動に関する研究を続けた。

留学後

帰国後は東大農学部博士課程に戻り、実験動物のヤギをモデルとして行動の制御機構に関する研究を行い、博士（農学）の学位を得た。博士課程修了後も研究員として行動生理学に関する基礎研究を続けていたが、一方で帰国直後から、動物福祉や犬猫の行動について専門家や一般市民

向けに講演をしたり、ペット雑誌の取材を受けるといった活動も行っていった。こうした活動は研究とは無関係と捉えられがちだが、伴侶動物に関する最新の知見を臨床獣医師や飼い主に対して還元することは、この分野の研究意義だと思っている。

犬や猫の行動やしつけの方法については、逸話的または経験的にもっともらしく語られることは多くとも、確証の得られた事実は少ない。高齢化や核家族化の進む現代社会では、動物がもたらす心理的・身体的・社会的効果を解明し、動物の持つ行動特性を理解してトラブルなく共に幸福な生活を送ることが求められている。現在勤務している帝京科学大学では、伴侶動物の行動学や人間との関係に関する研究教育に力を入れた学科が四年前に新設された。まだ若輩の私がこの理想的な職に就けたのも、財団のご支援で留学を果たしたことが直接結びついており、感謝が尽きない。第一一回人と動物の関係に関する国際会議が二年後に東京で開催されることも決定し、この五年ほどの間に日本でも着実にこの分野への関心が高まり、研究が進みはじめている。この状況を嬉しく、また身の引き締まる思いで迎えており、今後も日本における人と動物の関係について探っていききたいと思う。

人と動物の関係から世界をみる

帝京科学大学理工学部アニマルサイエンス学科講師

加隈良枝

かくま よしえ

国際文化交流財団一九九八年度海外派遣奨学生。九七年東京大学大学院農学生命科学研究科修士課程修了。九八〜二〇〇〇年英国エジンバラ大学およびサウザンプトン大学に留学。九九年エジンバラ大学大学院応用動物行動学および動物福祉に関する修士課程修了。〇二年東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。東京大学研究員、麻布大学獣医学部非常勤講師を経て〇四年より現職。専門は応用動物行動学、動物人間関係学。



英国留学のきっかけ

英国での留学を終えて帰国してから早くも五年が経とうとしている。幸運にも国際文化交流財団の奨学生として採用され、一九九八年秋から英国スコットランドのエジンバラ大学で、動物福祉に関して学ぶ修士課程に留学した。授業、試験、そして論文作成のためのプロジェクトを一年間でこなすという英国人学生にとっても過酷なコースだったが、途中で挫折したら財団の方々に顔向けできないという適度な緊迫感があったからこそ修了できた。語学は好き

だったが、留学自体にそれほど憧れのなかった私が渡英を決意したのは、自分の興味ある研究テーマに関して国内では十分な答えが得られないという焦燥感からだった。

大学から動物行動学を学んでいた私は、人間は伴侶動物や畜産、動物園など、さまざまな形で動物を利用し恩恵を受けているが、動物の側は何を感じているのだろうか、という素朴な疑問を抱いていた。動物介在療法など動物の持つ癒し効果が注目を集めるようになっていたが、動物との交流を超越自然現象と捉えたり、動物を擬人化して感情的に扱うことは、冷静な議論にならず何

●国際文化交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三〇カ国の大学・大学院へ一五四名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国四二九名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

の利益も生まないと感じていた。そんなとき、牧畜業や動物愛護の先進国といわれる英国を中心とするヨーロッパでは、動物を利用しつつも動物にとってより良い生活を提供すべきという動物福祉の思想に基づき、動物の内面を生理学や行動学の手法により科学的に評価したり、倫理・経済・法律等の面から動物に対する人間の責務について議論したりする研究が進められていると知った。これらについて体系的に学べるコースがエジンバラ大学のみが存在していたことから、ぜひ学びたいと思っていたところ、奨学生として採用され、まさに背中を押された気分です。

アジア人という実感

四〇名ほどのクラスに留学生は八名ほどいたが、東洋人は私一人だった。最初はあまり気にしなかったが、動物虐待の現状に関する議論になると分が悪かった。ヨーロッパ人ばかりのクラスでは、「アジアでは」